



2026（令和8）年4月27日発行  
（編集）愛光本部  
（TEL）043-484-6391  
（HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

一年を締めくくる3月を迎え、愛光ではこれまでの日々の歩みを振り返りつつ、各現場では、今年度を締めくくる忙しさの中にも、利用者と穏やかな日々を共に過ごしています。

日々の活動を支えてくださった皆様のご理解とご協力に、深く感謝申し上げます。新しい年度は、今回得た繋がりをさらに育て、地域の皆様と共に歩む愛光の歴史を、一歩ずつ力強く積み重ねてまいります。

### □事業経過など（2026.3.1～）

3	火	業務執行会議/BCP 対策研修
5	木	Co-Connect 福祉
8	日	ボランティア交流会
12	木	コ・ヒューマントレーニング
14	土	理事会
15	日	家族協議会
16	月	佐倉圏域事業部実績会議
18	水	法人墓参り/地域食堂ともいき
19	木	5S 研修
23	月	本部実績会議/人事ワーキング会議
24	火	採用後1年・試用期間終了面接
25	水	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/財務プロジェクト
26	木	労務管理者研修
27	金	高齢者福祉事業部実績会議
28	土	評議員会

## ■月報から

### □ 新規取組み「まるごと体験 福祉の職場」（本部）

3月6日、学生を対象とした新たな認知拡大および将来の採用広報に向けた種まきとして、職場体験イベント「まるごと体験 福祉の職場」を開催した。福祉の仕事に対する不安を解消し、リアルな魅力を伝えることを目的とした初となる取り組みである。当日は6名の学生が参加し、障害者支援事業所の見学や、実際の作業を体験するプログラムを実施した。特に、先輩職員との座談会では、仕事の醍醐味から苦労話まで率直に語り合う場面があり、非常に盛り上がった時間となった。参加した学生からは「職員の方が赤裸々に話してくれたので、就職したあとのことをより想像しやすかった」との感想をいただくなど、大変好評であった。今後のインターンシップや説明会への参加を希望するという、次年度の採用活動に繋がる確かな手応えを得ることができた内容であった。（総務課長 宮本 典昭）

### □ メイン外出（ルミエール）

今年度より、利用者外出行事の名称を「グループ外出」から「メイン外出」に変更した。理由として、集団での行動が困難なケースの増加、および利用者が主役となり、好きな場所で好きなことを楽しんでもらいたいという思いがあるためである。その中で、今月実施した外出についていくつか報告する。

1人目は、銚子市から入所した利用者である。海や魚が好きな利用者が楽しめるよう、担当職員が企画を立案した。内容は、釣り堀居酒屋での釣りとお食事である。竿にかかった魚を釣り上げ、その場で調理して食べるという内容で、アジやタイを釣り、大変喜ばれた。

2人目は実家へ帰省する外出であり、佐倉から相模原まで車で移動した。キーパーソンである祖母はこれまで施設へ面会に来ていたが、年齢的な理由により来訪が困難となったため、こちらから訪問する形で実現した。利用者にとって実家であるものの、幼少期から施設で生活してきたため、どのような心境であったかは計り知れない。父親と祖母とともに寿司を囲み、穏やかな家族の時間を過ごされた。

3人目はトランポリンが好きな利用者である。ご家族より「思いきりトランポリンができる施設に行きたい」との希望があったため、担当職員が浦安のトランポリン施設へ同行し、家族と現地集合で実施した。施設内はトランポリンに特化しており、安全面にも十分配慮されていた。全盲の利用者およびご家族も安心して利用し、楽しむことができた。

1年間メイン外出を実施して感じたことは、利用者の楽しみの可能性は無限に広げることができ、職員はその実現を支える重要な役割を担っているという点である。利用者の特性により遠出が難しい方や、長時間の外出が困難な方に対しても、職員ができる支援を考える良い機会となった。主役である利用者にとっての「幸せとは何か」を常に考え、来年度の外出行事へつなげていきたい。（ルミエール課長 原 宏之）

### □ 令和7年度 利用者満足度調査集計結果および今後の対応方針について

#### （根郷通所センター）

昨年度の調査では回答率が68%と過去最低となったが、今年度は回答しやすい環境を整える目的でオンラインアンケートを導入した。その結果、対象者31名のうち未提出は1名のみとなり、回答率は97%と、前年度を大きく上回る結果となった。

今回の調査では、多くの項目で8割から9割以上の方が「満足」または「やや満足」と回

答しており、全体として高い満足度が示された。この結果を踏まえサービスの質をさらに高めるため、以下の3つのポイントに重点を置き対応を進めていくこととする。

#### 1. 旅行・外出支援の充実と実施方法の見直し

グループ別旅行については、特に満足度が高く「満足」「やや満足」を合わせて約97%であった。ご家族からは「陽気の良い時が良い。特に暑い時期は避けてもらいたい」とのコメントが寄せられたが、結果として気温の高い日となってしまうことがあった。今後は実施時期や行き先に十分配慮した計画とする。

また、一部のご家族の意見として寄せられた「一泊二日旅行」の再開については、利用者の活動の幅を広げる機会となる一方で、職員の勤務状況や業務負担への配慮も必要であることから、実現の可能性については慎重に検討することとする。

#### 2. 身体活動の機会拡充と「クラブ活動」としての作業充実

「運動の機会を増やしてほしい」という声が複数寄せられ、特にウォーキングやストレッチの要望が確認された。現在、根郷通所センターでは、作業と余暇をバランスよく取り入れた活動を原則としているため、今後もこの方針を大切にしながら活動内容の充実に努める。

#### 3. 工賃還元方法の見直しと情報発信の充実

ご家族より、「工賃を受け取ると嬉しそうな様子を見せており、働いたことに対する励みになっている」。また、前は現金での還元を希望された方からは、「金銭がわかる人のことを考えて選んだがイベント還元でもよいと思う」との声が寄せられた。今回の集計結果では「現金還元（13名）」より「イベント還元（17名）」を希望する声が多いことが確認されたため、次年度は利用者を楽しんでいただける形で施設内外のイベントを通じた作業工賃の還元を実施する予定である。

また、「日中の様子を知りたい」という要望に応え、LINEや「おひさま便り」を活用した情報発信を引き続き行い、施設での様子をより分かりやすくお伝えできるよう努めていくこととする。

その他の意見として、「本人の希望を引き出すコツを知りたい」との声があった。根郷通所センターでは、障害特性に応じた方法で本人の希望を引き出すことを大切にしており、希望を引き出すことが困難な場合には、職員間で多面的に意見を出し合いながら支援を行っている」と返答している。

また、「グループ別旅行が良い思い出となり、写真を繰り返し見ている」との声も寄せられ、今年度の目標として取り組んできた余暇活動の充実が、利用者にとって楽しい経験や思い出づくりに繋がっていることが伺えた。

今回の高い回答率と全体的な満足度の高さはシステムの変更による効果だけでなく、家族の関心や期待の表れであると受け止め、更なるサービスの改善と充実に努めていく。

(根郷通所センター所長 菊地 暁生)

### □ 個別支援計画作成会議の実施（山王の家）

年1回、関係者が集まり、利用者の今年度の振り返りと来年度の計画・目標を検討する機会として実施した。利用者家族8名と保佐人1名、相談員等がそれぞれ参加した。参加者が複数人いることで、これまで把握できていなかった情報や多様な意見を得ることができ、利用者理解を深める有意義な場となった。家族からの話は多岐にわたり、利用者本人のことに

加え、家族や兄弟に関する内容まで幅広く挙げられた。特に多く聞かれた課題として、家族の高齢化が挙げられる。身体的な負担の増加により、通院の付き添いや日用品の購入が難しくなっているケースが見られた。また、兄弟への負担を懸念しつつも、今後は関心を持って関わってほしい、親亡き後の支援を託したいという思いも語られた。利用者自身も、加齢に伴いこれまでできていたことが難しくなっている様子が見られる。参加した利用者は、家族の話をもてなやかに聞いている方、自身の目標を発表する方、日常の出来事を話す方、緊張して何も発言できない方など様々であった。この会議は今後の支援内容の検討が主目的ではあるが、利用者の生活背景や思いを関係者間で共有し、理解を深めることの重要性もあると改めて感じた。

(山王の家 岡本 綾子)

## □ 入居者の状況（ジョーの家・宮前の家）

### ○ジョーの家

～個別支援計画書 モニタリングと目標見直し～

入居者3名に対し、各自モニタリングを実施した。Hさんは希望する就労へ動き出したものの、本人が認識する「できること」と実情が乖離していた。その影響で日常生活全体が乱れ、就労面でも遅刻が重なり雇用解除に至った。次年度は、まず日常生活を整えることを最優先事項として計画を見直すこととした。Aさんは一人暮らしに向け、少しずつではあるが、できることを増やしている。他者とのコミュニケーション方法など依然として課題はあるものの、理想とする生活に近づけるための目標を見直した。Yさんの健康面について、本人は「大丈夫だ」と述べているが、過食の傾向が見受けられるため継続的な確認が必要である。生活上のこだわりに関しては、本人と社会通念とのずれを修正する試みを継続している。世話人側も世話人会議を通じてYさんの特性への理解を深めたことで、本人も穏やかに過ごす場面が増えている。次年度も、各入居者が目標に近づき、社会で自立した生活を送れるよう、一人ひとりに寄り添った関わりを大切にす方針である。

### ○宮前の家

～自立した生活「やりたいを形へ」～

視覚障害があるHさんは自立心が非常に強く、盲学校卒業後から親元を離れ、現在は宮前での生活を開始した。本人より単独外出の希望があり、1月から歩行訓練士による指導および職員との歩行練習を重ねてきた。その結果、訓練士より単独歩行の許可（独り立ちのお墨付き）を得るに至った。単独外出の開始にあたっては、両親に不安の色も見られたが、最終的には同意を得ることができた。3月21日の通所作業終了後、初めて一人で自宅近隣駅までの帰宅に挑戦し、無事に目的地へ到達した。今後も入居者が「グループホームでの生活をどう構築していきたいか」を職員と共に考案し、地域における自立した生活の実現に取り組む所存である。

(ジョーの家・宮前の家 高橋 健)

## □ 基幹相談支援センターとしてやれること…（アシスト）

アシストでは基幹相談支援センターの取り組みとして、奇数月に「合同事例検討会」を開催している。検討会には相談支援事業所だけでなく、地域包括支援センター、くらしサポートセンターさくら、佐倉市社協権利擁護班、訪問看護事業所など、多方面から参加いただいている。内容としては事例検討だけでなく、昨年度は研修会なども実施した。3月は今年度最後の検討会として、通常的事例検討ではなく、参加者に「事例検討会で取り上げてほしい

こと」や「最近困っていること」などを皆で話し合う場を設けた。今回寄せられた意見には、アセスメントについて、8050問題、依存症への対応、障害当事者の話を聞く機会、はざまの支援などがあり、この他にも多くの意見が挙げられた。

アシストが長年行ってきたこの事例検討会は、高齢・障害・困窮など様々な分野の人が集まって話し合うことができる数少ない機会である。この貴重な時間を活かし、基幹相談支援センターとして地域づくりや事業所間の連携強化の一助となるよう、次年度も様々な取り組みを考えていきたい。  
(アシスト 小平 和俊)

#### □ 「ふれあい配食サービス」受託終了（はちす苑）

平成21年より佐倉市からの委託事業であった「佐倉市高齢者等ふれあい配食サービス事業」を、配送員の担い手不足等の事情により3月31日付で受託終了とした。配食サービスは、地域の独居高齢者に夕食のお弁当を届ける傍ら、その方々の安否を確認するという目的の事業である。はちす苑は佐倉市の南部地域を担当していた。地域柄、昔からの大きな日本家屋にお一人で暮らしている方もいる。以前は大勢の家族に囲まれて暮らしていたであろうと想像すると寂しそうにも感じるが、同時に逞しく生活している様子からは力強さもうかがえる。いつまでも住み慣れた地域で暮らし続けたいという希望を少しでも長く支えるための大切な事業であり、福祉に関わる方には、一度で良いので是非配送を体験してほしいと思っていた事業である。今後は配食専門の業者に引き継がれ、お弁当の配達と安否確認は変わらず継続される。

(はちす苑課長 梶 直芳)

#### □ 今年度最後のオレンジカフェ（佐倉市南部地域包括支援センター）

22日（日）、今年度最後のオレンジカフェが開催された。今回の内容は、前半がフルートとピアノの演奏会であり、南部包括職員によるフルート演奏と、職員の知人によるピアノ演奏で構成した。

現在、オレンジカフェの参加者は70～80代が中心であり、男女問わず音楽を好む参加者が多い。そのため、音楽を取り入れ、参加者が癒やしのひとときを過ごし、一緒に歌ったり身体を動かしたりして楽しめるよう開催している。今回も歌詞カードを用意し、参加者は一緒に歌って楽しむことができた。認知症当事者からは「歌詞は覚えていなくても、メロディーを聞くと懐かしい気持ちになる」との声が聞かれた。また、夫婦で歌詞カードを見ながら仲良く歌う様子も見られた。

後半は、毎月ボランティアで協力している第一興商の音楽健康指導士による音楽体操を行った。これはカラオケDAMを使用し、脳トレも取り入れたものである。特に家族介護者が自身の介護予防や気分転換のために楽しみにしている印象がある。認知症当事者についても、単独での参加が難しい場合があるが、包括職員やボランティアスタッフが隣で声掛けを行うことで共に参加できている。

オレンジカフェの開催については、「認知症の人が尊厳を保ちながら社会の一員として尊重される社会」の実現を目的とした「認知症基本法」が令和6年1月1日に施行されことに伴い、認知症当事者の意向を反映したカフェの開催を目指している。「皆で歌を歌いたい」「昔ゴルフをやっていたからまたやってみたい」「美味しいお菓子を食べながらお喋りしたい」といった様々な意見を汲み取りながら、認知症当事者も共に参加できる企画を行っていく。

来年度も引き続き「はちす苑」を会場に、毎月オレンジカフェの開催を計画している。今後ははちす苑職員やボランティアの協力を得ながら、認知症当事者・家族・地域住民・専門職が気軽に集える場所としてオレンジカフェを開催していく。

(佐倉市南部地域包括支援センター 森 由美子)

## □ 2025年度を終えて（佐倉市南部児童センター）

今年度は、年間を通して多様なイベントを実施し、利用者の参加意欲や関わり方に大きな変化が見られた。一方で、活動の広がりに伴い新たな課題も明確になった。以下では、利用者の傾向とあわせて今年度の状況を振り返る。

まず、利用者数は昨年度より約3,000人増加し、27,000人を超えた。コロナ前の年間30,000人に近づきつつある。内訳としては、ここ数年減少していた乳幼児親子の利用が増加した。イベントを楽しみに来館する親子が増えたことに加え、育休を取得する父親が増え、育児に積極的に参加する家庭が増えたことが背景にあると考えられる。佐倉市には子育て支援センターや園庭開放を行う幼稚園が多く存在するが、その中でも当施設が乳幼児親子のニーズに合致していると感じている。

また、小学生の利用はコロナ前を大きく上回り、過去最高で10,000人を突破した。特に低学年の利用が多く、毎日のように来館する子もいる。家庭でも学校でもない「第三の居場所」として定着し、保護者からも安心して遊ばせられる場所として認識されているようだ。

今後の課題としては、利用者数がキャパシティの限界に近づいていること、職員不足が続いていることが挙げられる。イベント運営の工夫や、長期休みに一日滞在する子どもへの対応方法など、支援の在り方を利用者の傾向に合わせて検討していく必要がある。

(佐倉市南部児童センター 吉田 知加子)

## □ 1人だけの6年生（和田学童）

彼は多くは語らない。下級生の喧嘩やおふざけが過ぎる時などには「おい、やめておけ」の一言でその場が収まるほど頼りになる6年生の男児であり、下級生からの憧れの存在であった。卒業お祝い会では、6年生への質問タイムに「好きな人は？」「1年生の中で好きな人は？」「2年生の中で好きな人は？」「3年生……4年生……5年生……」と、同じ質問が出るほど、皆彼に「好き」と言って欲しくて質問攻めにしていた。彼から「選べないよ」という言葉をもらっただけで、皆ニコニコしていた。卒業式を終え、在校生より先に春休みに入るため、学童を一人で朝から利用することになる。保護者からは「1人で留守番できるから家にいたら？」と声を掛けられたそうだが、「行こうかな……」と、1日だけ利用した。その日は下級生が遊べるようにと、職員と一緒に野球盤を作成してくれた。下級生が「すげー！」「遊ぼう！」と喜ぶ姿を優しく見つめる彼を、大人たちも見つめ、涙が出そうであった。

(和田学童 平野 美幸)

**□ 南部地域福祉センターのボランティアが「愛光ボランティア交流会」に参加  
(佐倉市南部地域福祉センター)**

3月8日(日)、南部地域福祉センターで定期的に活動しているボランティアが、はちす苑千田ホールで開催された「愛光ボランティア交流会」に参加した。

南部地域福祉センターに定期的に通っているボランティアの活動内容は、地域の高齢者に向けたサロン事業の手伝いや、童謡や唱歌のピアノ演奏、ゲートボール場の整備、脳トレの講師、絵画教室の講師などである(当日は不参加の者もいた)。

当日のはちす苑千田ホールの会場では、愛光本部や地域食堂を中心に活動しているボランティアが多かったが、南部地域福祉センターとはちす苑を兼ねて活動している音楽関係のボランティアもあり、多くの方と和やかに交流していた。食事会の中では、山王地区在住のベテランボランティアをはじめ、愛光との付き合いがとても長いボランティアも参加しており、特に土地の開発時期から発展までの歴史的変遷を知っている男性ボランティアからは、とても貴重な話を聞くことができた。(佐倉市南部地域福祉センター 青山 秀人)